



： 卷 頭 言 ：

和の国、日本よ、いつまでも

(財) 日本植物調節剤研究協会 評議員
BASF アグロ (株) 開発登録本部長

今井康史

はじめに：

先日の体育の日、NHKテレビの「鶴瓶の家族に乾杯」という番組をみて、先般渡欧して以来続いていた疑問について、「これだ!」と思ったことがあった。このことにつきこの拙文でふれてみたい。

欧州社会の農薬に対する厳しい見方：

現在欧州連合では農薬の登録基準を改定しようとする動きがある。この改定は施用量・使用方法により実際に安全に使用されている農薬でも、その潜在的危険性（ハザード）が認められる場合は足切り、つまり登録失効にしておこうという意図に基づいている。これはビタミンAやDもその毒性により農薬としての登録が不可能になるようなルールである。欧州委員会案では既存の農薬登録の約15%、さらに厳しい欧州議会案では85%が失効すると試算されている。ここには、現在、農薬が農業生産に必要な不可欠の資材であり、安全に使用されているという事実に対する認識が抜け落ちているように思える。この背景には反農薬団体の活動が欧州社会や議会議員に効果的に影響を及ぼしているということがある。

二者対立の考え方：

一方、このような改定案が実施されると農業生産が困難になるとして、英国では9月末に農業関係の団体がまとまって、首相あてに陳情し、この新規制案の農業に対する影響調査を早急に実施するよう欧州連合および各国政府に対し働きかけてほしい主旨を伝えている。

このような極端な動きの背景には欧州に特有の「二者対立」の考え方があるように思う。現地である同僚から聞いた「欧州では農薬をつかう農民を消費者が黙って信用するなんてありえない!」という意見とも符合する。

ひるがえってわが国を見てみれば：

欧州社会の二者対立の構造の考え方にはとて

も違和感をもって帰国した。その上で、「家族に乾杯」をみて、素朴なおじさん、おばさんのふるまいに実に心が和むことから、自分には同じ日本人としての共感があることを発見した。多くの日本人に共通の心情だと思う。日本社会には、まだまだ、心のいちばん底のところお互いを思いやる心がある。あるいは自分が誠意をつくしてやっているから他人も同じだろうという期待感がある。

わが国に食の安全、安心、環境への関心の高まりと懸念があるのは欧州同様であるが、大部分の消費者の気持ちの底には同じ国民である政府・公的機関や農家に対する信頼感があると観察される。専門外の方と農薬の安全性について話すとき、ポジティブリスト制度実施とそれに伴う記帳運動の広がりには社会の安心にとり非常にプラスに働いていると、実感する。スーパーマーケットで見かける生産農家の写真入りの表示に安心する気持ちは、多くの日本人に共通する感情であり、農家に対する信頼感に根ざしていると思う。

われわれにできることは：

国民が互いに共感、信頼感をもって暮らすという状況が今後も続いていけばよいと思う。そのためには、一人ひとりが社会の持ち場、持ち場で誠意をもって働くことである。私ども病害虫雑草管理の仕事を生業とする者としては、農業現場の問題点を解決するような新製品を世の中に出していくのはもちろんだが、農家の方が安心して使用でき、自信をもって農産物を出荷できるような製品、技術、十分なサポート情報を提供していくことが大事と考える。これが農家の自信と消費者の国産農産物への信頼につながっていくとの期待がある。このようなことを通じて、少しでもわが国の農業振興と食糧自給率改善に貢献できればよいと思う。